

| Column |

ART & CULTURE around 芸劇

豊かな体験を創り 劇場を育む アクセシビリティ

異なる特性を持つ人々が舞台芸術と出会い、
安心して鑑賞できる劇場へ。
東京芸術劇場におけるアクセシビリティの実践。

「多様な人が“自分の劇場だ”と思える場こそ、本当の意味での劇場なのだと思います」。ある意見交換の場で、東京芸術劇場・社会共生担当の三谷淳さんが言った。

アクセシビリティは「アクセスできること」を意味する言葉で、製品やサービス、情報などを、誰もが利用できる状態にすることをいう。劇場においては、体験のしやすさやその環境づくりであり、ソフトとハードの両面で考えることが重要だ。

劇場を訪れる際、さまざまなバリアや不安に直面する人がいる。安心して観劇を楽しめるための工夫として、鑑賞サポートがある。たとえば、聞こえない、聞こえにくい人への字幕機の貸し出しや手話通訳、見えない、見えにくい人に公演の視覚情報をお伝えする音声ガイドや鑑賞前に実施される、上演中に使用されるセットや小道具などに触れるタッチツアーや車いすを利用する人や補助犬ユーザーのスペースの確保、またWEBサイトでのアクセシビリティ情報の発信も欠かせない。

東京芸術劇場では、12年以上にわたりこの取り組みを続けてきた。社会共生担当という専門部署が月に2回程度、鑑賞サポート付き公演を企画する。作品との相性やさまざまな条件を踏まえ、広報から受付、鑑賞まですべてのプロセスに来場者への想像力を働かせている。

その積み重ねの先に、2023年には当劇場主催の木ノ下歌舞



1



2



3

1 新設された「アクセシビリティ・デスク」 2 東京芸術劇場 Presents 木ノ下歌舞伎『三人吉三席初買』(2024年9月)でのポータブル字幕機 3 ダミアン・ジャレ×名和晃平『Planet[wanderer]』(2025年11月)での舞台模型を使ったタッチツアー

伎『勧進帳』の巡回公演で、全国6劇場に鑑賞サポートを付帯。初めて利用した人からは「こんなに演劇を楽しめたことはなかった。心に栄養が満たされていくような気持ちになった」という声が寄せられた。「劇場に足を運ぶことは、単に舞台を見る行為ではなく、集い、共感し、語り合う複合的な体験だ」と巡回先の劇場職員も気づきを得た。

昨年11月の舞台『TRAIN TRAIN TRAIN』では、理解するためのサポートではなく、視覚だけ、聴覚だけ、視覚と聴覚の両方でも、それぞれの感覚から物語を味わえるよう「想像することを楽しむための工夫」をとりいれた先進的なアクセシビリティの試みが行われた。

こうした潮流の中、それでも推進者たちは「アクセシビリティに正解はない」と口をそろえる。人の数だけニーズがある。だからこそ「小さくとも、はじめたらやめないこと。独りよがりではなく、利用する人との対話の上に進めることを大切にしたい」と同担当の多田和代さんは言う。良かったことも失敗も含め、対話を重ねながら方法を模索する姿勢が東京芸術劇場らしさだと思う。

アクセシビリティを通して劇場は多様な人とつながることができる。一人ひとりの意識や視点が変わり、豊かな体験や文化が育まれていく。そうして劇場はひらくれていくのだろう。

文：平原礼奈（編集者・手話通訳士）



35 東京芸術劇場

Tokyo Metropolitan Theatre

企画編集・発行／東京芸術劇場 事業企画課 広報営業係

企画編集／noi株式会社(殿井悠子、塚原沙耶)

校閲／朝日新聞総合サービス株式会社(AGS)出版校閲部

表紙写真／撮影：濱津和貴 デザイン／REVEL46(志村正人)

印刷製作／株式会社技秀堂 ◎東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)

INFORMATION

東京芸術劇場では、2025年9月のリオープンより、1Fのボックスオフィス（総合案内）横に「アクセシビリティ・デスク」を新設し、アクセシビリティの各種案内やサポートツールの貸し出し、遠隔手話サービスなどを提供しています。スタッフ不在時は、ボックスオフィスにてご案内いたします。

WEBページには、より多くの方が舞台芸術を楽しめるようにするためのアクセシビリティ／館内サービスをまとめて掲載しています。

▶ <https://www.geigeki.jp/accessibility/>



●掲載情報に変更が生じる場合がございます。最新情報は、劇場や各主催者のWEBサイトなどでご確認ください。次号の発行は2026年4月1日を予定しています。